



仁淀病院からのお知らせ



～仁淀病院が新しくなります～

仁淀病院院長

松浦喜美夫

仁淀病院は昨年からの改築工事が進んでいましたが、ようやく完成し、3月28日から新しい建物に移り、診療を開始しました。今後は古い建物を解体し、駐車場や外構を整備し、秋にはグランドオープンとなります。

仁淀病院の歴史

仁淀病院は昭和27年4月10日に旧伊野町と5カ町村による仁淀地区国民健康保険組合病院として現在の公民館の場所に病床数50床で開院しました。初代院長は外科の吉野位先生で、外科の他に内科、小児科の診療が行われていました。その後、結核病棟を新築し、病床を増やし、産婦人科、耳鼻咽喉科、整形外科などの診療科も増やししながら、規模を大きくしてまいりました。昭和47年4月に現在の駅東町に移転新築し、その後も老人病棟、後の療養病棟45床や、リハビリ棟、手術・管理棟を増築し、診療科も眼科と循環器科の診療科を開設し、病床は一時最大170床になりました。さらに平成2年には、病院の敷地の北側に介護老人保健施設「仁淀清流苑」94床を併設し、介護の分野でも充実を図りました。しかし、平成13年に、医師の引き上げ問題などで、医師数が減り、病棟閉鎖に追い込まれ35床休床せざるを得なくなり、療養病床も減らし、現在まで介護療養病床41床と、一般病床90床で運営してきました。病院の建物は築後40年を経過し、老朽化が著しく雨漏りや廊下の傷み、設備の故障が多くなり頻回の修理が必要となり、改築が検討されて、昨年からの同じ場所で一部を取り壊しながら改築し、この度新しい建物が完成し移転となりました。

新病院では、医療技術の進歩、生活習慣や交通事情の変化、肺炎などの感染症の減少、糖尿病や高血圧などの慢性疾患やがんなどの増加による疾病構造の変化などの医療環境の変化を考慮し、また、いの町の将来の人口の減少や、国の医療政策を考え病床数を減らします。一般病床を60床と減らし、そのうち亜急性期の病床を10床とし、介護療養病床を40床、合計100床で運営いたします。

これからの仁淀病院の役割

日本は現在、世界で最も高齢化が進んでいる国で

すが、特に高知県では顕著です。いの町においても65歳以上の高齢者は30%を超え、特に山間部の吾北、本川地区では高齢化が著しいのが現状で、仁淀病院の入院患者の平均年齢は80歳を超えており、入院患者の疾病構造も慢性疾患の割合が多くなってきています。今後も30年間は少子高齢化が進み、高齢者が40%を超え超高齢化社会を迎え、多くなる高齢者をいかに支えるかが大きな社会問題となります。多くの住民が望む住み慣れた場所で最期まで暮らすための、医療と保健、福祉、介護の連携の仕組み作りが大切と考えられます。仁淀病院ではこれらの地域の問題に全力で取り組みます。いの町における地域医療とは「町民すべての健康にかかわるすべてをカバーする医療」と考え、医療はもとより町民の健康を守るとの観点から、予防や介護、福祉にいたるまで、総合的に包括的にかかわり、町民全体から信頼と安心を得る機能が必要と思います。仁淀病院を中心に行政や高度急性期病院、地域の病院・診療所、介護サービス等との連携ができ、結果として在宅での治療や療養が安心して受けられるような仕組みづくりを目指し提案します。

【町民への健康情報拠点】

町民への疾病・治療・健康に関する情報提供や啓発・相談窓口の拠点として、地域医療連携室を設けます。「いの町」の「ほけん福祉課・地域包括支援センター」や他の医療機関、地域内の薬局、福祉施設などとの連携活動を支えるためのIT対応に必要な施設構造とし、町民が自ら学習できる医療や健康に関する図書コーナーや検索スペースも設けます。

【疾病の早期発見・予防のために】

町民の健康維持には何より疾病の早期発見や予防のための検査が大切で、院内に独立した入口を持つ健診センターを設けます。放射線部門や内視鏡室なども集約し、外来患者とは別のルートでアプローチできるように配慮し、受けやすい健診施設を目指します。

特定健診・特定保健指導への対応も配慮したスペースとします。